

苦くて、冷めない

—かのう。

Bitter yet never fades.



珈琲
時雨

—時雨—



一度だけ——、
それできつとあなたを、
諦められるから



雨が降っていた。

細かく。

絶え間なく。

サー、と静かな音と共に降り続けるその様が、断ち切れない糸のようで。まるで、この胸に宿る想いのようだと、思った。

俺は、坂上雨音（あまね）。県内の学校に通う高校生だ。

俺には好きな人がいる。家の近くにある喫茶店の、マスター——柊清十郎だ。

祖父と同じ年だというその老いた男に、もう何年も前からずっと、叶うことのない恋をしていた。

コーヒーを入れる年齢と経験を刻み込んだその手に、俺が小さい頃からずっと変わらないその笑顔に。ずっと、ずっと……心を囚われてきた。

誰とも結婚もせず、子どももいないまま、ずっと一人で古びた喫茶店を営んできた彼が、どんな人生を歩んできたのか。彼の半分も生きていない俺には想像もつかない。

けれど、自分の気持ちだけは、わかる。

サイフォンを見つめる真剣な横顔をみるだけで、俺の心臓は早鐘のように脈打ち、胸の奥が甘く蕩ける

のだ。

この人は、どういう風に人に触れるのだろう。

どんな声で、愛を囁くのだろうか。

大学への進学を機に、家を、この街を離れることになった。

このまま、この想いを忘れて遠くへ行くなんて俺には出来なかった。

だから、俺はようやく胸に長く抱いたままだった恋を、手放す事に決めたのだ。

ただ、一度。たった一度だけ、彼に抱かれることで。

俺の出した要望に、ルールを決めたいと言ったのは男のほうだった。それはこの行為に意味を持たせない為に。これがただ一時の気まぐれであり、決して恋などではないのだと、俺に思い知らせるために。それでも、よかった。

ただ一度。たった一度でもあの人に触れてもらえるならば。

指定されたのはあるホテルの一室だった。

目的が近くなるにつれ早くなる鼓動を抑えて、俺はドア横のインターフォンを押した。

「失礼します」

部屋に入るとすぐさま。背後に回った男の手で目隠しをされた。柔らかな布地が光を奪い、頭の後ろできゅ、と僅かな絹鳴りと共に結ばれる。これが、ルールの一つ。

とくり、と心臓が大きくなった。期待などしてはいけないと思うのに、体が勝手に熱くなっていくのを止められない。

緊張に喉が渴く。こくりと喉が動くのを見て、男。柊さんが動きを止めた。

「怖いですか？」

俺は慌てて首を振った。違う。そうじゃない。怖い、わけじゃないんだ。思わず柊さんに腕にしがみ付いた。

「違うっ、これは、そうじゃなくて……俺は……」

止めますか、なんて言われるのが一番怖い。だって俺は……

「ふっん……」

顎を指先で持ち上げられて、唇に柔らかな湿った感触。優しいその感触にくらくらと目眩がする。嬉しい、なんて。

「あ……」

ちゅ、と最後に唇に吸い付かれて離れていく感触に、思わず溜息が零れた。

「こちらへ」

腕を捕られベッドへと誘導される。肩を押され背後に倒れこむ俺の体を、スプリングのきいたベッドが支えた。すぐ後にぎしり、とマットレスが沈み、俺以外の誰かがベッドにあがったのがわかった。

するりと指が伸びてきてシャツのボタンを外していく。ぷつり、ぷつりと風を感じる面積が増えていく。俺は期待で息を弾ませながら、見えない目を凝らして柗さんの姿を想像する。

どういう顔をしながら。年下の、それも男の服なんかを脱がしているんだらう。いつもの優しげで、それでいて冷静な表情だろうか。……不本意なことをさせているのだから怒っているのかもしれない。だが、少しは興奮してくれると、嬉しい。

十条家の三人のご主人様と私

発行日：2026年6月6日

著者：かのう。

サークル：まるつと

表紙・本文制作：かのう。

© 2026 かのう。